■ 研究論文

山縣有朋の庭園観と椿山荘

Aritomo YAMAGATA's Image and View of Gardens and Chinzan-so

鈴木 誠* 栗野 隆** 井之川若奈***

Makoto SUZUKI* Takashi AWANO** Wakana INOKAWA***

摘要：明治時代の代表的軍人・政治家である山縣有朋（1838～1922）は築庭を趣味とした。近代日本庭園の形に強い影響を与えた庭園として無鄰庵が有名だが、この庭は山縣を施主として植治（七代目小川治兵衛）が作庭した。したがって、山縣は近代日本庭園のデザインに強い影響を与えた人物とされる。しかし、植治と無鄰庵庭園についての研究は数多いものの、山縣と庭園とに関する研究は少ない。そこで本研究は山縣有朋の庭園観について、植治と出会う以前に造営した椿山荘庭園を中心に分析考察し明らかにすることを目的とした。結果として、山縣の庭園デザインの根源に、彼の故郷萩の山川の風景－原風景があることが指摘できた。

1. はじめに

近年、日本の近代庭園に関する研究が盛んになり、その成果の一つとして「京都を中心とした近代日本庭園の研究」¹⁾がまとめられている。また、平成15年度の日本造園学会全国大会分科会でも取り上げられ²⁾、ますます話題の多い研究分野となりつつある。

その近代日本を代表する庭園デザイナーとしては、まず京都の植治こと七代目小川治兵衛（1860～1933）の名が上がり、その代表的庭園としては施主山縣有朋の意向を持って植治が完成させた庭、京都東山の無鄰庵庭園（1896）があげられる³⁾。

七代目小川治兵衛（植治）は「近代庭園の先覚者」として位置づけられ、京都の岡崎・南禅寺の無鄰庵・平安神宮・對龍山荘・織宝苑・清流亭・有芳園、碧雲荘・怡園など植治のデザインの本質を語る庭園群が今に残り、それは東山を望む雄大な空間構成、琵琶湖疏水の水を引入れた軽快な流れのデザイン、明るく開放的な芝生広場、そして林間に見え隠れする瀟洒な茶室のたたずまいの情景にあるという⁴⁾。

その作風は、周囲の自然や風景をも庭園内に取り込み、おおらかで明るい構成をもった自然主義の庭とも称されるもので、特に滝と流れを中心とした水景の扱いに独自の世界を築いた⁵⁾。

このような植治の新しい造園手法が確立される契機となったのは、無鄰庵庭園の施主・山縣有朋（1838～1922）との出会いであり⁶⁾、「明治期の新庭園が打ち出した特色は、山縣有朋の造園感覚そのものである」⁷⁾とも指摘

され、山縣が明治中期以降の庭園様式の形成に多大な影響を及ぼしたと考えられる。

植治の作風や庭園デザインについては、尼崎ら⁸⁾によって体系的にその特徴が整理されているが、植治の造園感覚を引き出した山縣有朋の庭園へのこだわりや思いの原点、すなわち山縣有朋の庭園観については明治中期以降の完成となる無鄰庵庭園や、大正初期完成の小田原・古稀庵庭園（1916）を事例とした考察^{9) 10)}にとどまっており、十分な検討が加えられているとはいいがたい。

また、本研究で対象とした椿山荘は、山縣が東京で初めて構えた本邸であり、生涯に造営した8つの邸宅の中でも規模が18,000坪余りと最も大きく、東京の本邸として使用した期間も人生の約半分に当たる40年間と長いことから、山縣の庭園についての意識・意向が強く出ているものと考えられる。しかし、椿山荘の本格的な研究は見当たらない。

そこで本研究は、日本における明治中期以降、20世紀の庭園様式の形成に多大な影響を及ぼした人物である山縣有朋の庭園観について、彼が植治と出会う前に造営した椿山荘庭園を中心に分析考察して明らかにすることを目的とした。

2. 山縣有朋とその邸宅

（1）山縣有朋の人物像

山縣有朋（写真－1）¹¹⁾は長州藩出身で、天保9年（1838）に現在の山口県萩市に生まれ、松下村塾に学び奇兵隊軍監、総督として幕末の動乱期に活躍した。その後明治時代になり、軍人として陸軍大将、参謀総長、元帥

にまで上りつめた人物である。また政治家としても活躍し、総理大臣として第一次山縣内閣（1889～1891）、第二次山縣内閣（1898～1900）を組織し、枢密院議長、元老筆頭を務め、その墓碑に「枢密院議長元帥陸軍大将従一位大勲位功一級公爵」と刻まれるなど、明治時代に最高の地位・栄典の全てを一身に集めた人物であった。そのため、日本の軍閥の元祖ともいわれるが、一方では書道や和歌などにも親しみ、特に山縣自身の庭園に見られるように築庭を第一の趣味としていた。

（2）山縣有朋の邸宅と庭園

記録に残る山縣最初の邸宅は、慶応年間（1860年代の後半）から明治33年（1900）まで使用した長州吉田清水山の無鄰庵。次に造営したのは明治11年（1878）から大正7年（1918）まで、東京の本邸として山縣40歳の時に完成し、80歳になるまで使用し続

写真－1 山縣有朋

*東京農業大学地域環境科学部 Department of landscape Architecture Science, Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture **独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 National Research Institute for Cultural Properties, Nara ***藤田観光工営株式会社 Fujita Kanko Kouei Inc.

けた目白関口台の椿山荘。そして明治 20 年（1887）山縣が内務大臣時代に湘南別荘として造られ、明治 40 年（1907）まで使用された神奈川県大磯の小洵庵。明治 24 年（1891）京都別邸として最初に使われ、明治 27 年（1894）には手放された木屋町の無鄰庵。続いて、山縣 56 歳の時にはじめて植治（7 代目小川治兵衛、当時 35 歳）を用いて作庭にあたらせ、明治 27 年（1894）に完成した京都別邸東山の無鄰庵。東京別邸として明治 35 年（1902）頃に完成した小石川水道町の新々亭。湘南別邸として明治 40 年（1907）に造営され、山縣終焉の地となった小田原の古稀庵。8 つ目は椿山荘を引き払った後、晩年最後の東京本邸となる大正 6 年（1917）完成の麹町五番町新椿山荘である。

山縣有朋の築庭趣味は、ここに掲げた 8 つの邸宅の庭園造りに発揮されたものだった。（表－1）^{12）13）} 残念ながら、山縣の邸宅の中で現存するのは京都市が管理する東山の無鄰庵、料亭となっている木屋町の無鄰庵、現在藤田観光株式会社所有となっている東京の椿山荘、そして大きく改変されてしまったがかりうじて庭園の面影を残す小田原の古稀庵であり、その庭園観を知りえるのは京都東山の無鄰庵・椿山荘・古稀庵の 3 庭園のみだけとなっている^{14）}。

（3）山縣有朋と椿山荘

東京都文京区関口二丁目に位置する椿山荘は、山縣有朋の東京本邸として明治 11 年（1878）に購入され、命名されて本邸としてのスタートをきった。「椿山荘」という名称は江戸時代以前から、関口台一帯が椿の名所として知られ「椿山」と呼ばれた地名に由来しており、庭園の起源は上総久留里藩黒田家の下屋敷にあった。

明治時代になり一時期、徳島藩の岡本監輔の手に渡るが、明治 11 年（1878）、西南の役が終わった後に東京近郊を来訪していた山縣がこの地を大変気に入り購入した。主屋は明治期における大邸宅の一般的スタイルであった和洋併置式邸宅が採用されていた。（写真－2）^{15）}

庭園の全体計画、細部意匠を指導したのは山縣自身であったが、これを施工したのは当時東京ではトップクラスの庭師として活躍していた雑司ヶ谷の岩本勝五郎^{16）}で、山縣は東京・神奈川に造営した椿山荘・小洵庵・新々亭・古稀庵・新椿山荘、といった邸宅すべての造園工事に岩本を起用した^{17）}。

山縣は大正 7 年（1918）まで椿山荘を東京本邸としていたが、山縣も 80 歳になり庭園の維持が困難なため、同郷の実業家・藤田平太郎に譲渡した。その後、藤田家本邸としての椿山荘は平太郎の長子・光一の所有となり、太平洋戦争後は藤田鉾業株式会社、藤田興業

写真－2 和館と洋館からなる主屋と芝庭

表－1 山縣有朋の邸宅の変遷

名称	年代	所在地	概 要
無鄰庵	慶応年間 ～明治33年	山口・清水山	長州吉田の清水山というところに営まれた小邸。松林の続く、水の流れの美しい土地であった。
椿山荘	明治11年 ～大正7年	東京・小石川関口台	湧水を積極的に活用した滝、流れ、池を有する2万坪に及ぶ大邸宅。早稲田一帯を見晴らすことのできるほど、眺望性に富んでいた。（東京本邸）
小洵庵	明治20年頃 ～明治40年	神奈川・大磯	約五千坪の敷地に営まれていた。庭園からは海が良く見え、遠くを見れば白波で船の姿がぼんやりと見えた。（湘南別邸）
無鄰庵	明治24年 ～明治27年	京都・木屋町	京都木屋町、二条橋畔のもとにあった角倉邸を購入して造営された。加茂川が高瀬川に分流するその流れが庭内を通過する土地であり、すこぶる水に富む庭であった。（京都別邸）
無鄰庵	明治27年 ～大正11年	京都・南禅寺	京都南禅寺近傍に造営された邸宅。庭園は東山の借景を効果的に使用し、手前は琵琶湖疎水から引いた水の流れる開放性をその基調としていた。（京都別邸）
新々亭	明治35年頃 ～大正11年	東京・小石川水道町	五百坪の土地に造営された邸宅。山縣死後は貞子夫人邸となった。神田上水を利用した池が設けられていた。（東京別邸）
古稀庵	明治40年 ～大正11年	神奈川・小田原	小田原城の跡地に造営された邸宅。滝、流れ、池を有し、相模灘への遠望を特徴とした。1.5 km離れた風祭水源池から水道（山縣水道）も引かれ、敷地内には皆春荘も設けられた。（湘南別邸）
新椿山荘	大正6年 ～大正11年	東京・麹町五番町	麹町五番町に七百坪余りの土地を得て造営されていた。椿山荘を藤田家に譲渡した後は正式な本邸としてこちらを用いていた。（東京本邸）

註：年代は山縣有朋が邸宅として使用した期間。無鄰庵は3つ造営されている。表中の「概要」は、徳富蘇峰(1933)：公爵山縣有朋伝：山縣有朋公記念事業会、下巻1118～1123。並びに、古稀庵記録保存調査団・鈴木博之(1982)：山縣有朋旧邸小田原古稀庵調査報告書：千代田火災海上保険株式会社、12～17.の記載事項を参考にして作成した。

図－1 椿山荘庭園の立地

表-2 山縣有朋と椿山荘庭園の歴史

年 代	所有者	事 項
1720(享保5年)頃	久留里藩 藩主 松平 久留里藩 藩主 松平 久留里藩	昔からこの地一帯に椿が多く自生していたことから椿山の名前で呼ばれていた。当時は百発地であったが、この頃から町としての体裁を整えるようになった。
1780~1800 (享保年間)		上総の久留里藩豊田屋前守の下屋敷として造営される。
1838(天保9)		△長州藩下級武士の子として現在の山口県萩に山縣有朋が誕生する(4月22日)。
1865~67 (慶応1~3明治元年)		△有朋が青兵衛にいた頃長州吉田駅の清水山の小屋を無鄰庵(1)と名づける。
1830~1904 (明治初期)		飯島藩の岡本監輔の所有地となっている。
1877(明治10)	山縣有朋 (1877~1917)	△山縣有朋が土地を購入し、椿山荘の造営に着手する。庭園の築造にも力を注ぎ、明治・大正期の東京を代表する庭師・岩本勝五郎を起用。目白台地の崖線を活用し、緩斜面に造成した芝生園地と流れ・池を特徴として庭園が整備された。
1878(明治11)		邸宅と庭園が完成し、椿山荘と命名される。
1887(明治20)		△山縣有朋が内務大臣時代、神奈川県大磯に小滝庵を造営(施工 岩本勝五郎)。
1891(明治24)		△京都本願寺二条松林旧角倉邸を買い無鄰庵(2)と命名する。
1894(明治27)		△京都南禅寺近傍に別邸の無鄰庵(3)を造営(施工 植治)する。
1902(明治35)		△新々亭を小石川水道町に造営する。
1906(明治38)		日露戦争のさなか、有朋の留守中に椿山荘に高橋善雄(善庵)が訪れる。
1907(明治40)		△小田原の古稀庵造営に着手(施工 岩本勝五郎)する。
1909(明治42)		皇太子嘉仁親王(後の大正天皇)が行啓。
1910(明治43)		明治時代を代表する文化人・近藤正一が椿山荘を訪ねる。東京を代表する名園の一つに選定され、本庭園は「名園五十種」(近藤正一著、1910)に掲載される。
1917(大正6)	藤田平太郎 (1893~1988)	△有朋80歳の誕生日の6月14日椿山荘で賀宴を開き、大正天皇より致を賜る。(6月14日)
1917(大正6)		△新椿山荘を椿山荘に替る別邸として造営する。
1918(大正7)		椿山荘の庭園維持が困難なため、一木一石も旧庭を失わないことを条件に藤田平太郎に譲渡される。
1918(大正7)		椿山荘、廣書院が竣工する。
1922(大正11)		△山縣有朋小田原の古稀庵にて歿する(2月1日)
1923(大正12)		廣書院が完成する。
1923(大正12)		関東大震災のため大きな被害を受ける。(9月1日)
1925(大正14)		京都の下加茂の伏見稲荷明神から白玉稲荷を勧請して椿山荘の守護神とする。
1925(大正14)		平太郎が丘の樹林を背景に三重の塔の配置を希望する。三重塔は、安芸国入間郡の霊山竹林寺にあったものを奈良の青蓮寺から譲り受けた。
1927(昭和2)		大正12年の関東大震災で根を揺すられた「天狗松」が枯死する。
1940(昭和15)	藤田光一 (1894~1947)	平太郎死去により長子・藤田光一が椿山荘を相続する。(5月)
1941(昭和16)		■太平洋戦争勃発後、平太郎夫人・富子は熱海の別荘に移る。
1945(昭和20)		東京大空襲により白玉稲荷、三重塔、蔵1棟を残し全焼し、樹木の大半も焼失する。池の周辺や丘はそのまま残る。(5月25日)
1948(昭和23)		藤田家財産の大部分は藤田興業株式会社を経て、藤田興業株式会社の所有となる。(8月)
1948~1953 (昭和23~28)	藤田興業 (1948~1953)	小川栄一(後の藤田観光株式会社初代社長)が戦災で荒廃した庭園部分の復旧工事に着手する。30人の苗木職人を集め、「東京に緑のオアシスを」の意思のもとに環境整備を積極的に行進する。
1952(昭和27)		滋賀銀行の好意によりホテル15000坪を庭内に放し、銀行関係者及び関係会社、株主を招待。(6月)
1952(昭和27)		椿山荘の本館一部が完成し、(10月)宿泊施設、料亭として椿山荘を開業する。(11月)
1953(昭和28)		椿山荘の日本館全館が完成する。(3月30日)
1955(昭和30)	藤田観光 (1955~1992)	藤田興業株式会社の全額出資により、藤田観光株式会社が設立される。(11月)
1958(昭和33)		三重塔前の「富士松」が枯死する。
1964(昭和39)		東京オリンピックを記念して国際ホールが完成する。
1965(昭和40)		五丈庵が完成する。(5月)
1983(昭和58)		椿山荘新館の新築とともに施も改造する。
1987(昭和62)		本格庭園づくりの料亭「銀水」が完成する。(9月)
1988(昭和63)		国際ホールが全館閉鎖すると同時に、解体工事が着工する。(12月)
1988(昭和63)		新チャペルが完成する。(2月)
1992(平成4)		ヨーロッパクラシックの最高級ホテル「フォーシーズンズホテル椿山荘東京」が完成する。
2003(平成15)		チャペルのリニューアルが実施される。(3月15日)

△は山縣有朋に、●は椿山荘に関するできごと、■はその他のできごと

株式会社をへて昭和 30 年（1955）から藤田観光株式会社の所有となって現在に至っている。以上、これまでの椿山荘の変遷の概略は、表－2 としてまとめて一覧とした。

なお、以降庭園の特色の考察年限は、山縣有朋がこの地に邸宅を営んでいた明治 11 年から大正 6 年（1878～1917）の間とした。

3. 立地と構成にみる椿山荘庭園の特徴

（1）庭園の立地と構成

本庭園は目白台地の南端部関口台に立地し、とりわけ椿山荘の敷地は複雑な崖線によって形成された 3 つの高台と、Y 字形の谷を有した、極めて変化に富んだ形状を示している（図－1）¹⁸⁾。

崖線沿いにはこの椿山荘庭園のほか、西に田中邸芭蕉庵・細川邸庭園、東に蓮華寺などがあり豊かな森が形成されていた。（図－2）¹⁹⁾ この地は一帯に水が豊かで、どの邸宅も池を有していた。崖線下には江戸川が流れて神田上水の大洗堰（関口）が設けられた。さらに南下すると湿潤な土地を活かした田地（早稲田田圃）が形成されて、目白台地関口近辺は湧水と河水、そして上水にまで恵まれた地域であった。

椿山荘庭園は目白台地の崖線によって庭園部分が高台、斜面、低地の比高差としては 1.4m 以上の高低 3 段によって構成され、芝生、樹林、水面の大きく 3 要素が配された形となっていた。

庭園構成の手法は、それぞれ独自のテーマで景をしつらえ、園路でそれらを連絡するという廻遊式を基調としたものであるが、江戸期の小石川後樂園や浜離宮庭園などと異なるのは、池を中心に設けて廻遊させるのではなく、池という面を滝～流れ～池による連続的な水景の系統に置き換えた構成をとり、廻るようになっていることである。

椿山荘庭園の水源は 2 箇所あり、一つは庭園内の小さな谷戸から湧き出る流れであり、そしてメインの水源は西隣の田中邸芭蕉庵の湧水である。芭蕉庵から導入された水が、椿山荘の中で滝や流れ、小池となり、さらにこの水が園外の旧江戸川に落ちる構成であり、本園を特徴付けている。

（2）「椿山荘七勝」にみる周辺環境との関係

椿山荘庭園の立地を際立たせるもうひとつの特徴は、台地端部に敷地が選定されたことによる優れた眺望性である。

山縣が詩歌のモチーフとして「椿山荘記」に記した「椿山荘七勝」（表－3）²⁰⁾ は、富嶽暮雪、芭蕉夜雨、駐橋夕照、早稲田落雁、蓮峯晚鐘、関口秋月、高田晴嵐、からなり園外の風致の美しさを贅えたものであった。これらは、椿山荘庭園内から見える風景や、聞こえる音など五感で感じる景観を表し、遠くは

早稲田田圃やその向こう高田村樹林地の牧歌的自然や富士山を望んだ象徴的点景が詠みこまれている。特に、「予にして、富人であったならば、早稲田一帯の地面を買い潰して、之を一面の池と爲し²¹⁾、椿山の風致を添ふることとせん」²²⁾ という言葉からは、山縣が山に對置する水と眺望に対して強いこだわりを持っていたことをうかがい知ることができる。

（3）「椿山荘十勝」にみる庭園構成の特徴

山縣は「椿山荘記」において、園外の風致

の美しさを「椿山荘七勝」に表したのに対し、園内の景勝地を「椿山荘十勝」²³⁾（表－4、図－3）として表している。「椿山荘十勝」からは山縣が構想した椿山荘庭園の特徴をみることができる。そこには、溪、瀑、橋、井戸が 1 つずつ取り上げられ、池、松、四阿が 2 つずつ取り上げられて十勝が構成されている。ここで特に着目したいのが、十勝のうち 6 つが水景に直接関係する点で、やはり山縣の水へのこだわりを強く感じるのである。以

図－2 山本松谷「目白台下駒塚橋辺の景」（明治 40 年）

表－3 椿山荘七勝とその概要

富嶽暮雪	邸宅の位置した庭園の高台から西南方向を望んだ際に、橙色の夕日が山頂に雪化粧をまとった富士山の背後を照らし、その富士の稜線が空にくっきりと浮かびあがっている様子。
蕉庵夜雨	庭園の西に隣接している芭蕉庵のうっそうとした森と草庵に、夜の冷たい雨が静かに降っている様子。
駐橋夕照	庭園から南に出てすぐそばの位置に流れていた江戸川も、その川に架かっていた駒塚橋にたたずむ人と橋も、橙色の夕日に照らされ、きらきらと輝いている様子。
早稲田落雁	みごとに実った黄金の稲穂の一面に広がる秋の早稲田田圃に、雁が群れをなして、飛んでいく様子。
蓮峯晚鐘	庭園の東側に隣接していた蓮華寺で、夕暮れの時を知らせる鐘が辺りに鳴りひびいている様子。
関口秋月	邸宅の位置した関口台から、秋のよく晴れた南の夜空に煌々と輝く月を、虫の音色と共に見上げている様子。
高田晴嵐	よく晴れた春の日に、庭園から西方の少し離れた高田村の田畑や山林に、かすかに青い大気が漂うように見えていた様子。

註：七勝の概要については、徳富蘇峰(1933):公爵山縣有朋伝：山縣有朋公記念事業会、1109－1110. を参考に作成した。

下、「椿山荘十勝」に表現された庭園の特徴を、水と流れ、四阿と眺望、松と芝生の三つの観点から紹介しておく。

a). 水と流れ

庭園の水系は2つあり主たる水源は西に隣接した田中邸からの湧水で庭園に引き込まれ、涵翠池に至りそこから聴秋瀑となって落ちる流れと、もう一つの水源は園内の谷戸の湧水で、竹裏溪となって流れ出て、その流れの中に湧井風の古香井が添えられ風情ある景色を形づくっている。この流れと聴秋瀑からの流れとの2筋が雲錦池で合流して、延年橋の下を通り園外の江戸川へと流れていく。この水系に十勝のうちの6つを当てている。

①涵翠池：ひょうたん形の池であり、十勝のひとつである。この池の水源は、隣接する田中邸芭蕉庵の湧水を活用したものである。その水源については、山縣と田中との間で種々の交渉が行われた結果、田中邸の湧水は永久に椿山荘庭園のものであり、水源は決して封鎖しないという契約がなされていた²⁴⁾ということからも、本庭園における水の意味の大きさが分かる。この池の岸にはクマザサが生い茂り、汀は苔蒸した石とアシによってしつらえられ、朽ちた小舟も浮かべられているなど、幽邃の趣を深くした点に特徴があった。

②聴秋瀑：涵翠池の岸がしだいに狭くなった箇所の落差3mを超える大滝で、十勝のひとつである。滝の帯はクマザサが茂り、ヒノキ、スギなどの常緑針葉樹の奥深い森となっていた。この森の間に、モミジが枝をさし交わしており、紅葉と滝音を「聴秋瀑」という名称に表現したものである。聴秋瀑から落ちた水は流れとなり、この滝と流れが作為のない自然な様相を呈していた。

③竹裏溪・④古香井：ともに十勝のひとつであり、涵翠池、聴秋瀑とは水源を異にする流れ（竹裏溪）と流れの中に設けられた井戸（古香井）である。一帯は庭園東側のモウソウチク林裏側のスギ林の脇にあり、一面の芝生の陽当たりの良い山懐のような場所であった。

古香井の脇には茅葺き屋根の小亭が設置され、その傍らには1株のウメが植栽されていた。井戸と小亭の背後には、高さ2m内外のまんじゅう形の小山が築かれており、背景の濃いスギの木立によって明暗の対比の美が生まれていた。古香井のほとりにはアシが生え、カキツバタが咲き、草むらには紫の小さな花房をつけたクサフジが群生しているなど自然のままの閑寂地で「庭中有数の佳趣ある」²⁵⁾場所であった点に特徴が見られた。

⑤雲錦池・⑥延年橋：ともに十勝のひとつである。田中邸芭蕉庵の湧水と古香井の湧水に水源を持っていた。この池にはカモやキジが棲んでおり、岸边は一帯がモミジ林で、その間にサクラが点々と植栽されていた。(写真－

表－4 椿山荘十勝とその概要

竹裏溪	モウソウチクの竹林の裏側にある谷に設けられた流れ。
涵翠池	庭園西側の田中邸の湧水に水源を持つひょうたん形の大きな池であり、岸が迫る狭いところは谷になって水が流れていた。
三又松	主屋前の芝生園地の斜面にあった古松。1本の幹から3本の大きな枝に分かれていたことからこのように呼ばれた。脇には雪見灯籠が設置されていた。
芙蓉亭	庭園西南の丘に建てられていた四阿で、天狗松の下に配置されていた。桂離宮の卍亭を写したものであり、ここから南方に早稲田田圃と、西方に富士山を望むことができた。
天狗松	芙蓉亭の脇に生えていた樹齢数百年を超える巨大な古松であり、主屋前から庭園を眺めた際の特徴的な点景となっていた。
聴秋瀑	庭園西側の涵翠池の水 flow を激しく落とす滝で、周囲はモミジが点在的に配されたスギ、ヒノキの濃い樹林であった。岸が狭くなっていき、そこに集まった水が流れて音をたてて滝となって落ちていた。
延年橋	雲錦池の池尻部分に架けられた野趣に富む土橋。
古香井	庭園中央の竹裏溪の流れの湧水地に設けられた井戸。脇には小亭が設置された。
雲錦池	庭園南側の一番低地にあった池で、庭園を流れる水はすべてここから園外に流れて行き、江戸川へと流れて行った。
稻香亭	庭園最南東の丘に建てられていた四阿であり、早稲田の耕田から吹き送る風の香りからこの名がついた。ここから早稲田村を一望することができた。

註：十勝の概要については、大橋乙羽(1896):山縣侯の椿山荘:太陽 2(8)、博文館、248－251。並びに徳富蘇峰(1933):公爵山縣有朋伝：山縣有朋公記念事業会、1110。を参考に作成した。

図－3 椿山荘庭園の概略平面と十勝の位置

3)²⁶⁾ また、池の兩岸をつなぐ延年橋は野趣に富む土橋であった。

b). 四阿と眺望

庭園西南と東南の高台にはそれぞれ四阿が配置されて、いずれからも早稲田や富士山などが眺望できた。「芙蓉亭」と「稻香亭」である。西南の高台の芙蓉亭は天狗松（後述）の下に設置されており、桂離宮の卍亭を写したものであった。東南の高台の「稻香亭」は早稲田の耕田から吹き送られてくる風の香に因んで名付けられたものであった。

この2つの四阿からは、江戸川の流れを眼下に見下ろし、南方には早稲田田圃、西方には富士山、東方には神田上水の関口の水音が聴かれるといった、江戸時代の芭蕉庵の景勝を描いた『江戸名所図会』の風景そのものであったようである。このように、四阿は園外の水景が見渡せる場所に配置され、庭園と周辺環境の水系との関係性をリアルに感じさせる眺望施設となっていた。

c). 松と芝生

椿山荘庭園には、3箇所あった高台のうちの2つに、崖線の斜面を生かした広い芝生園地が造成されていた。この開放的な芝生園地が背景の濃い樹林と好対照をなして、鷹揚で陽気な風致が形成されていた。

2つあるうちの芝生のひとつは、主屋前に配されたもので、斜面の裾は緩やかに南方へ流れ、砂利敷の園路が縦横に設置されていた。主屋の前面から斜面にかけてマツが眺望を妨げないように点在するように配されて、明るい芝生の添景物となっており、とりわけ、斜面の中腹に設置された雪見灯籠の脇に植栽された「三又松」（1本の根元から3本の太幹が風情よく枝を張った巨松）は、庭園西南の高台から北東を見通した際の特筆すべきアクセントとなっていた（写真－2参照）。

また、庭園西南の高台も一面の芝生であり、こちらも斜面にはマツが群植されていた。この斜面の松林の上端部分には、富士松と称される老松があり、富士山のように枝を広く張った名木であった。

さらに本庭園で最も高く、一面の芝生園地となっていた場所には、「天狗松」という自然樹形を基調とした4本の巨大な古松があり、主屋前から庭園を眺めた際の特徴的な点景となっていた。

このように、椿山荘庭園は広い芝生とマツがワンセットに扱われていたが、主屋前の芝生と、谷を挟んだ高台にも芝生を配することにより、風景を連続的に展開させて広がり感が強調され、さらにこの広がり・開放性は、園外の早稲田田圃の田園風景とも呼応する牧歌的で素朴な仕上がりとなっていた。

写真－3 三又松と雲綿池を隔てて早稲田を望む

4. 見学記・記事にみる椿山荘庭園の特徴

椿山荘庭園については、早くは大橋乙羽（1896）²⁷⁾、内山正如（1908）²⁸⁾らがこの地を訪れて見学記を遺している。とりわけ、明治・大正期における生花界の重鎮であり、庭園や室内装飾にも精通していた近藤正一（1910）²⁹⁾は、「若し趣味（中略）・・・真の天然趣味に富たる庭を求めたならば都下は勿論恐らくは日本に於てもこの山縣公の椿山荘の庭の右に出るもの無いであらうと思ふ、城北目白の高台の一部に居然として横はれる一大園地否一箇の森林で位置形勝実無比の幽境である、庭には山あり池あり杜あり谷もありて加之も橋梁亭榭は勿論、四阿も塔も（中略）・・・庭園としての副飾物は何一つ欠けて居るものはない」と、この庭園に最大の賛辞を記している。

山縣有朋存命中に山縣邸としての椿山荘庭園を記したのは上記の3つと思われるが、この他、山縣亡き後の思い出として、あるいは藤田邸時代（1918）以降の椿山荘庭園に関する記事は数多い。そこで、これらの庭園見学記や記事に表現された椿山荘庭園の特徴を、表－5のようにまとめた。そして、これらの文献に記述された椿山荘庭園を整理したところ以下の6つとなった。

- ① 自然主義、天然趣味で回りの自然環境を利用しつつ、自然をつくり出し出していた庭園。
- ② ちまちました細かい庭づくりではなく、豪壮で大胆に造られた庭園。
- ③ 目白台地の崖線を利用して、高低起伏にとんだ変化ある庭園。

- ④ 東都には珍しく湧水があり、その水を池にめぐらせたり、流れにしたりと非常に水にこだわりを持って造られた庭園。
- ⑤ 目白台地の崖線上にあるため、優れた眺望をもつ庭園。
- ⑥ 従来の伝統的な日本式庭園とは異なり、山縣独自のスタイルで造られた新しい庭園。

5. 山縣有朋の庭園観

（1）山縣有朋の庭園観とされるもの

山縣有朋の庭園観については、既にいくつかの研究にて部分的にふれられている。

鈴木（1982）³⁰⁾は「山縣有朋の庭園は、大局的には自然主義の庭園であって、古来の作庭技法が役石を中心に据える象徴主義の庭園を目ざしていたのと、明らかに対照をなしている」とし、また「山縣有朋の作庭は、結果として専門の庭師たちの採用する新手法となっており、明治大正期の和風庭園の中に根をおろしていったのである。象徴主義的庭園から自然主義的庭園への変化は、近代和風の一大特徴であり、そこに山縣有朋は無視し得ぬ足跡を残している。」と指摘する。

小野（2000）³¹⁾は「山縣の庭園観とその背景」と題し、「無鄰庵庭園築造にあたっての山縣の構想の基本にある庭園観は、立地を最大限に活かし、自らの美の基準で見出した景観を実物大で写實的に庭園内に再現するもの」とする。そして、明治期東京の庭園に関する田中の研究成果³²⁾を引用しつつ「椿山荘をはじめ他の（東京の）庭園のデザインも、象徴主義的な手法は用いず山村や溪流などの景観

表-5 記述された椿山荘庭園の特徴

著者・出典	庭園の特徴
大橋乙羽(1896) 山縣侯の椿山荘: 太陽 (2)8: 博文館: p248	志かも、その花の美しくて、散ることの脆は椿のみかは、瓦となりて全からむよりは、寧ろ玉の砕くるに若かずとて、椿山荘は侯爵山縣大将の、世を隔てたる村荘なり。
大橋乙羽(1899) 名流淡海: 博文館: [引用文出典: 故山縣元帥の庭園観: 庭園と風景(9)1: 日本庭園協会: p19]	何処までも幽邃と豪壮と兼ね備わらなくちゃいかんという考ひで、今度は我流にやって退けた。木には一層の生氣を添え、水には一段の勢いを見せて、彼處に仰いで積翠を見る幽邃の處もあれば、此處には俯して深潭を窺う豪壮の趣があるというようにしたい目的だ。
内山正如(1908) 椿山荘: 家屋と庭園: 博文館: p257	緑の色深き葉隠れに純白の花を點綴する茶畑、茶畠の所々に立てる桃の一株は、ふくやかな薄紅の荳を満枝につけて、今一雨もあらば笑ひ初むるだらうと思はるる田舎めく趣味までが又この庭の副景となって、その廣やかな自然的の情致は都下の諸侯伯の園地にも多くその儔を見ない所である。
近藤正一(1910) 名園五十種: 博文館: p59	眞の天然趣味に富みたる庭を求めたならば都下は勿論恐らくは日本に於いてもこの山縣公の椿山荘の庭の右に出るもの無いであろうと思う、城北目白の高臺の一部に居然として横たわれる一大園地否一箇の森林で位置形勝實に無比の幽境である、庭には山あり池あり杜もあり谷もありてしかも橋梁亭榭は勿論、四阿も塔も・・・庭園としての副飾物は何一つ缺けて居るものはない。
高橋箒庵(1922) 山縣公のおもかげ・山縣元帥追憶百話: [引用文出典: 旧文再見・山縣有朋公の築庭趣味: 庭別冊(12): 建築資料研究社: p66]	公は庭を造るに地相を見ることが上手で、水が自然に流れている処を好み公が庭を造られた処は皆な天然の流れがある。 公は水を利用することが非常に得意であった。夫れで公は『水なき庭は庭にあらず、如何に良い石があつても、如何に良い樹があつても、水が無ければ其石や樹に湿りが無い、随つて又庭に動きが付かぬ、庭内総ての物は唯水に依つて動くのだから、何をしても庭には水が無くてはならぬ』と平常言つて居られた。
高橋義雄(1925) 椿山荘観楓会: 山公遺烈: 慶文度堂書店: p199	椿山荘の如きは此數者の中に於て確かに一頭地を抜きたるものにして殊に東都に珍しく園内に泉の湧き出で、懸つて瀑となり蓄えて池となるのみならず其水の極めて清浄なるは當荘名物の一として見るべく此一事は岩崎男の駒込庭園と兩々匹敵して東都園藝家の共に欣羨する所なり若し強て難を云えば面積凡そ二萬坪の内溪山三分の二に居りて個人の住所としては寧ろ都合よき方なれども天下の名園として論ずれば聊か平地に乏しきの憾なきに非ず出来得べき事ならんには田中伯邸と合併して之を一庭園となさま欲しく斯くせば京都の修學院と相對して當に東西一對の名園たるべきなり。
龍居松之助・関倫三郎(1928) 日本名園百種: 庭園と風景(10)8: 日本庭園協会: p14	もとの山縣公爵邸で、目白臺の形勝無比の幽境に位する、和風林泉式の趣致に富んだものであるが、藤田男が手に入れてから、一部の改造をした。
高橋箒庵(1933) 目白椿山荘講評: 箒のあと(上): 秋豐園: p406	橋もこれでは粗末なり、捨石も今少し奮發して欲しい、又書院に近い崖際に、柿の木のあるのは不似合なり。
田村剛(1942) 山縣有朋公と庭園: 庭園(24)5: 日本庭園協会: p175	山縣公の好まれた庭というもの、いづれにしても、地形に相当の變化がありまして、そして環境を出来るだけ利用する、利用し得るような場所を選んでおられるということに、まづ氣がつくのでございます。それから庭園の様式一と強いていえば、これは山縣流といつてもいい一つの流派を、スタイルを樹てているといつてもよいと思うのでございますが、非常に判っきりした個性をもっております。一と口でいへば、作者の態度は自然主義であり、その手法は大膽、豪放な作りだということが、いへるかと思うのであります。
西田富三郎(1959) 東京の庭: 紀伊国屋書店: p155	園は高低起伏にとんだ地貌を利用したもの。 一部を除いては、明るい近代的な自然風景園を構成している。
古稀庵記録保存調査団・鈴木博之(1982) 山縣有朋旧邸 小田原古稀庵 調査報告書: 千代田火災海上保険株式会社: pp10-12	湧水を幽翠池と雲錦池という池に巡らせ、この間を聴秋瀑という閑雅な落水によって結んでいる。庭師は岩本勝五郎。山縣有朋の庭園は大局的には自然主義の庭園であつて、古来の作庭技法が役石を中心に据える象徴主義の庭園を目ざしていたのと、明らかに対照をなしている。 従来の伝統的手法を無視する態度は、明治期特有の文化的バーバリズムに墮する危険を大いに秘めていたとはいえ、山縣有朋の作庭は、結果として専門の庭師たちの採用する新手法となつて、明治大正期の和風庭園の中に根をおろしていったのである。象徴主義的庭園から自然主義的庭園への変化は、近代の和風庭園の一大特徴であり、そこに山縣有朋は無視し得ぬ足跡を残しているのである。
龍居竹之介(1984) 椿山荘いまむかし-三代に伝わる東京の庭-庭別冊(36): 建築資料研究社: p153	山縣の作庭理念が、自然を利用し自然を模倣し、かつ自然をつくり出すというところにあつたせいだ。椿山荘の場合も天保年間に水のために崩れた崖はそのまゝにして、そこへ雑木雑草を生い茂らせるといったことを好んでしているくらいである。しかもそれはすべて山縣の設計になるもので、一木一草にいたるまでその指示によって植えられたという。
田中正大(1987) 近藤正一と明治の庭園: 造園の歴史と文化、養賢堂: p152	山縣有朋の椿山荘は、目白台地の斜面を利用したものだが、若い頃に見たこの庭のすばらしさはいまも忘れがたい。台上にたつて谷筋を越えて樹間に見られる牛込台地への展望は、自分のいる場所が東京だとは、とても考えられないものであつた。庭園の良さのかなりの部分は自然そのものにあつて、そこを選ぶかどうか、その多くがかかっていることを知らされたことであつた。

を实物大で写実的に取り入れており、あきらかに無鄰庵に見られる庭園デザインと共通するものがある。その背景にある施主の庭園観は、山縣のそれと共通するものであり、いわば明治時代の東京の新興有産階級のひとつの典型的な庭園観であったと言えるのである。ただし、明治10年から築造された椿山荘の庭園は、これらの庭園の中でもっとも早い時期のものと考えられ、山縣がこうした庭園観の牽引役であったことは、確かであろう。」と考察している。また、こうした庭園観の形成に山縣らの渡欧体験が無視できない役割を果たしたと推測し、ヨーロッパの風景式庭園の影響を指摘する。

矢ヶ崎(2001)³³⁾は『山縣有朋は自らの庭園観を「雄大」「豪壮」ということばで説明し、苔の寂よりも芝生の明るい開放感を、留まった池の水よりも躍動する流れを好んだ。(中略)園内の景観が連続するように、自然をありのままに表現しようとした(黒田天外『続江湖改心録、1907』)』とし、また「開放的で、自然の景観をできるだけありのままに表現する。そして躍動的な水の表現。これは近代の京都という固有の条件のもとで生まれた山縣の庭園観であった、といってしまうとそれまでであるが、そうではなく、ひろく日本庭園の近代性、つまり近代における和風庭

園の造形的特徴のひとつとして考えてみてはどうだろうか。」と提案する。

尼崎(2002)³⁴⁾が「山縣有朋の造園観」とするのは、「つまるところ自然景観と水のデザインという点に収束する」とまとめ、この自然景観を取り入れ、水をうまく利用する手法は明治期の新庭園に求められていたものであり、「明治期の新庭園が打ち出した特色は、山縣有朋の造園感覚そのものである。」と断言する。

以上、山縣有朋の庭園観については既往研究でほぼ同じ答えが出ている。しかし、その庭園観形成に関しては唯一、小野が芝生広場の導入、農山村などの景観の写実的・原寸大の取り込み、園外景観の積極的な庭園構成要素への取り入れ、などからヨーロッパの風景式庭園の影響を読み取ることができる³⁵⁾、と考察するのみである。

(2) 山縣有朋の庭園観と原風景

山縣有朋の庭園観が自然主義的であり、自然景観と水のデザインに特徴が出ているとすると、そうした庭園観形成を説明するのに、ヨーロッパの風景式庭園の影響だけでは納得できない面がある。特に、水の庭園デザインに関係した山縣の庭園観の形成については、これまでこれを説明した論考を管見にして知らない。そこで、椿山荘庭園の水景の特徴を

再度確認しつつ、山縣有朋の原風景に水景構成の根源を探ってみた。

椿山荘庭園は、湧泉(涌井)、滝、流れ、池といった庭園の水景に関する多くのデザインボキャブラリーが用いられて全体が構成されていた。特に水景の特徴となっているのは、庭園内に山懐があり2筋の水流を持ち、これを合流させてひとつの流れとしながら園外へ注ぎ出している点である。この2筋の流れによる水景構成手法は、山縣の築庭趣味が発揮された、残りの2つの代表的庭園、無鄰庵庭園と古稀庵庭園にも共通してみられる。(図-4)

無鄰庵では庭園水景のために初めて使用した琵琶湖疏水を三段の滝から導水して池・流れとする水路、そしてもう一筋の水路(旧草川・現在は疏水の水利利用)からの流れが合流して一つになっている。

古稀庵では、庭園内に水を流すためにわざわざ1.3kmも離れた風祭という土地に直径26m、深さ4mの摺鉢型の巨大な水源池をつくって、そこから鋤鉄管で送水し、2筋の流れが合流し池となり滝となる水景を形づくっている³⁶⁾。

この三つの庭園に共通した、水景の系統が類似している空間構成の特徴から、山縣の庭園構想には、山懐と流れ、それも2つの水流

図-4 椿山荘・無鄰庵・古稀庵の庭園水系

が合流するイメージがある、と指摘できる。即ち、山縣の庭園観の基盤には山懐から2筋に流れ出て変化する水流のイメージ、風景概念を強く感じるのである。

さてここで、こうしたイメージの源泉を山縣の出身地である萩市の景観に着目し、これと山縣の庭園観との関係を見てみたい。

a). 萩市の景観の特徴

萩の名が歴史上に登場するのは、慶長9年(1604)に毛利氏が指月山麓に萩城を築いたことにより、萩藩36万石の城下町となつてからである。文久3年(1863)までの約260年間毛利の萩城下町として栄えた萩は、幕末には維新の先覚者吉田松陰をはじめ高杉晋作、久坂玄瑞、木戸孝允、伊藤博文など多くの逸材を世に送り出しているが、山縣有朋もその一人であった。

この萩という地名の由来は、「つばき」が訛って「ばき」「はぎ」になったという。萩市内には「椿」や「椿東」という地名が存在し、その椿東の北端にある笠山地区は、25,000本にもおよぶヤブツバキ群生林で知られている。このように、萩と椿は深い関係にあり、山縣が東京の本邸に目白の椿山の地を選んだのは、故郷の椿山と一致したからであるとの指摘もある³⁷⁾。

萩の地理的特徴としては、図-5のように一方が日本海に面し、3方を山に囲まれ、阿武川が分岐した2本の川(橋本川・松本川)に抱かれたデルタ上に発展した街であることがあげられる。しかも、これは近世日本全国262の城下町の中でも唯一のものであり、他の都市には見られない萩だけの特徴的な地勢であるという³⁸⁾。

図-5 萩の地勢解析図

図-6 萩市の日本海側からの鳥瞰〔吉田初三郎「萩市街鳥瞰図屏風」昭和7年(1932)萩博物館所蔵〕

b). 山縣有朋生誕の地と原風景

山縣有朋は天保9年閏4月22日(1838年6月14日)長門国萩城下川島庄(山口県萩市)に父・山縣有稔、母・松子の間に生まれた。安政5年(1858)6月21歳のとき久坂玄瑞の紹介で松下村塾に入門。文久3年(1863)1月士雇に準ぜられ、12月奇兵隊に参加している。したがって、20歳ころまでの幼少年期から青年期にかけて萩に生活し、萩の地を原風景として育ったのであった。その生誕地川島は名のとおりの橋本川のほとりに位置し、近くには萩城下町に給水した用水路・藍場川が流れ、松本川まではわずか数百m、阿武川の分岐点までも1kmたらずの距離にあり、2本に分流する川の分流域が幼少時から慣れ親しんだ風景であった。そして川島の橋本川対岸が椿、松本川対岸が椿東の地名をもつ地区である。(図-5、図-6)³⁹⁾

山縣の事績については徳富蘇峰による『公爵山縣有朋伝』(山縣有朋公記念事業会、1933)をはじめとして、数多くの記録・記事があるものの、山縣の幼少年期の様子を記したものはこれまで見当たらなかった。しかし、筆者らの現地調査を通じて、阿武川分岐点に置かれた「御山路神社旧碑」⁴⁰⁾の碑文の中に、山縣有朋自身が語った幼少年期の原風景の記述を発見した。

その全文は図-7のとおりだが、以下が山縣の原風景についての主要な一文である。

「公爵山縣有朋篆額(中略)予実ニ川島ニ生レ家社地ニ近シ垂髪ノ時常ニココニ嬉戯セリ老蒼ノ樹清烈ノ淵祠宇ヲ圍繞セルノ光景今尚眼底ニ在リ(以下省略)」(写真-4)

この石碑が刻まれたのは大正2年(1913)である。当時山縣は75歳、大きな樹木や清らかな水をたたえた淵が神社を囲んでいた幼少時のこの地の光景が、今も目に浮かぶように記憶にあるというのである。

遠くに・近くに眺望できる緑の形よい山々(面影山・焼下山・田床山・指月山など)、水量豊かに流れて2つに分かれる川(阿武川、松本川・橋本川)、その水を取り水して街中を変化しながら流れる水路(藍場川など)、日本の城下町でもここにしかない特異な地勢が形づくる風景、川島を中心としたこの萩の風景こそが山縣の原風景であった。

(3) 山縣有朋の原風景と椿山荘庭園

これまでの原風景一般の研究などからも、山縣有朋の萩において形成された原風景が、彼の庭園観に影響し、自らの邸宅の庭園の構成を規定していった、と考えることは妥当であろう。そこで、再度椿山荘庭園の構成に山縣の原風景に類似したものを求めてみよう。

椿山荘庭園には、今もこの庭園を特徴づけている水景系統(涵翠池、聴秋瀑、古香井、竹裏溪、雲錦池)が残っている。それは、こ

御山路神社舊碑

公爵山縣有朋篆額

川島ノ地ハ萩城ノ東南ニ在リ阿武松本二川ノ分岐スル所潦水一タヒ至レハ氾濫ノ害避遁ニ彌ル郷人之ヲ患ヘ弘安二年播磨國廣峰ヨリ天王社ヲ勸請シテ水災鎮護ノ神トス社ハ素盞鳴尊稲田姫命ノ二神ヲ祀リ配ス埃ニ水門神速秋津彦命邊秋津姫命ヲ似テ以後ニ御山路神社ト改稱ス祖傳ヲ祠滅リテ後潦水ノ災永ク熄ミ船師ノ風波ノ難ニ遭フ者擣レハ則チ應驗アリト遠近仰敬シ領主ノ崇信本頗ル篤ク創建以來六百ノ星霜ヲ閱シテ新徳愈□新ナリ會□明治四十三年神社併合ノ事アリ本祠亦官命ニ依リテ舊城廊内ノ春日神社ニ併祀ス是ニ於テ郷人社趾ノ湮滅ヲ恐レ相議シテ其地ヲ塞ケ之ヲ予贈リ保存ノ事ヲ委セントス予實ニ川島ニ生レ家社地ニ近シ垂髪ノ時常ニココニ嬉戯セリ老蒼ノ樹清烈ノ淵祠宇ヲ圍繞セルノ光景今尚眼底ニ在リ郷人ノ懇請豈弁スヘシケンヤ乃チ欣然之ヲ諾シ聊力修理ヲ加ヘ郷人游息ノ恵ト為シ其由ヲ石ニ勤シ永ク後昆貽スト云爾

大正二年

公爵桂太郎撰

図-7 「御山路神社旧碑」石碑文

写真-4 御山路神社旧碑(2003年12月19日撮影)

の地のもつ自然地形の基本的骨組みが、古来2筋の流れを生む地形であったからに他ならない。山懐（谷あい）からの流れ出る川が、緩やかな平地を流れ下る地形構造は、彼が生まれ育った萩の風景の縮図的構図にも感じられるのである。（図－5、図－6）そして、椿山荘庭園とも共通する豊富な水をわざわざ用い、園内の流れを2つの系統にもして、さらに変化をもたせた庭園構成は、南禅寺の無鄰庵にも、小田原の古稀庵の庭園にもみられたものであった。（図－4）

また、椿山荘が立地した目白台下には江戸川（現神田川）が流れ、さらにその傍らに神田上水が流れていた風景は、あたかも萩の藍場川や市中の水路のような風情を醸し出していたように思える。それは、山本松谷描く明治40年（1907）頃の景色からうかがい知ることができるのである。（図－2）

こうした事実を考えたとき、山縣がここを本邸の地として選んだのは、単に椿山という地名がふるさとの地名と同じであったからである⁴¹⁾、というのが事実だとは思えない。江戸時代の終わりさえ、既にこのあたりには多くの椿を見ることはなかった。

また、「開放的で、自然の景観をできるだけありのままに表現する。そして躍動的な水の表現。これは近代の京都という固有の条件のもとで生まれた山縣の庭園観であった」⁴²⁾といった、山縣の庭園観の生成を京都に求めることも（それもたぶん東山界隈の自然景観や、琵琶湖疏水に）、山縣の萩における原風景を知り、目白台関口あたりの土地の地形や水環境を考えたとき、妥当なものとは思えない。

この土地の状況を強調するような築庭こそ、椿山荘庭園の姿であり、萩の風景を意識しての作庭であったと考えられるのである。

さて、椿山荘庭園の丘の上の表現に用いられた芝生園地は（写真－2）、山縣が営んだ庭園の特徴の一つとしてもあげられるが、彼が芝生を用いた明るい園地表現を好んだことを、どのように解釈すべきであろうか。

これについて、小野（2000）は「山縣の庭園観とその背景」を説明した文中において、明治期の新興勢力の邸宅所有形態の理想は、江戸時代からの富商や上級武士家層のそれと、地主貴族やカントリージェントルマンといった西欧上層階級のそれとを混同したものを想定していた、という鈴木の指摘⁴³⁾に付け加えて、「庭園のデザインにおいても、ひとつの理想として、イギリスを起源とするヨーロッパの風景式庭園を想定していたのではなからうか。単に芝生の広場を導入するといった表層的な模倣にとどまらず、農山村などの景観を庭園内に写実的に実物大で持ち込み園外景観を積極的に庭園の構成要素に取り入れると

いった彼らの庭園観やそれに基づくデザイン感覚には、渡欧の際に実見したヨーロッパの風景式庭園の影響を読み取ることができるのである。」⁴⁴⁾とする。しかし、その根拠となる山縣が渡欧の際に実見し彼の庭園作りに影響を及ぼしたとする、具体の庭園と山縣との関係や、山縣の風景式庭園についての感想などは示されていない。

椿山荘庭園の芝生について直接に触れたものではないが、野村（1997）⁴⁵⁾は「無鄰庵の庭園の特長である芝生の広がりについて、わが国の庭園史では英国の風景式庭園の影響をあげています。はたしてそうでしょうか。また、見落としがちな特長として建築の床の高さよりも高い位置に、池の水面があることがあげられます。」として、広がりある芝生と、建築の床の高さよりも池の水面が高い位置にある点から、この2つの特長を満たす他の庭園として山口県の常栄寺をあげ、さらに池や滝の位置・形状などの構成に検討を加えた結果として、「無鄰庵はほとんど常栄寺庭園の写しといつて過言ではありません」とする。

無鄰庵が常栄寺の庭園の写しだとすると、それを写した施主山縣がこの常栄寺の庭園を熟知していたことになる。たしかに、山縣の生まれ故郷である萩周辺の名園として、常栄寺はあげられる。

さてそれでは、常栄寺に芝生が用いられ広がりのある庭園表現がなされたのはなぜなのか。この庭園の景色によく似た自然風景が、やはり同じ山口県内に存在する。それは、芝状のなだらかな丘陵上に自然石が点在する風景をもつ、国の特別天然記念物・山口県秋吉台である。この自然風景が、山縣のふるさと萩に近いことなど、山縣有朋の庭園観が形成された原点を萩に暮らした原風景から、さらに秋吉台という特異な自然風景地にまで広げべきか否かの検討は今後の課題としたい。

6. まとめ

これまで、近代日本庭園のデザインに多大な影響を及ぼしたとされる山縣有朋については、植治を使用した京都東山・無鄰庵庭園の作庭とデザインに重きを置いて語られることが多かった。また、京都の庭園を中心とした植治研究は尼崎らによって体系的になされているのに比べ、植治の作庭に強い影響を与えた山縣が営んだ庭園と、彼の庭園観についてはまとまった研究は心もとない状態であった。特に、山縣の東京本邸であり、京都東山の無鄰庵造営の16年も前に、山縣の最初の本格的な庭園として造られた椿山荘の庭については、近代庭園研究としてまとまったものがなかった。

本論考は、この椿山荘庭園の山縣時代の庭園像を明らかにし、またこの庭園の各種評価

や山縣本人による優れた庭園景の選定などから、その特長を確認してまとめた。その大きな特長である水環境に恵まれ、眺望のよい立地、そして園内を貫くように変化する水景の系統は、その後別邸として営まれた京都東山の無鄰庵庭園にも、小田原の古稀庵庭園にも共通するものであった。山縣が椿山荘庭園にこだわったこうした庭園構成の骨格は、山縣の生まれ育った山口県の萩だけがもつ特異な地勢に共通するものであることを指摘した。

椿山荘庭園もう一つの特徴、明るい芝生の広がりを山縣が好んだ理由については、山口県の常栄寺や秋吉台の景観との関連がありそうだが、この件の検討は今後の課題としたい。

謝辞：本研究を進めるにあたり、資料提供等、藤田観光工営（株）諸井宏益氏には大変お世話になった。また、現地調査のアシストを快く引き受けてくれた鈴木男人君にも、感謝申し上げたい。なお、本研究を取りまとめるにあたり、平成16年度東京農業大学大学院高度化推進経費による助成を受けた。

補注並びに参考文献

- 1) 小野健吉（2000）：京都を中心とした近代日本庭園の研究：奈良国立文化財研究所，140 p.
- 2) 赤坂信・小野良平・佐々木邦博・鈴木誠・仲隆裕・服部勉・平澤毅（2004）：平成15年度日本造園学会全国大会分科会報告「ランドスケープ近代化遺産を考える」－明治時代に作られた空間の形・デザイン・特徴－：ランドスケープ研究 67(3)，240-247
- 3) 鈴木誠（2000）：庭園デザインの系譜：ランドスケープ大系第3巻（社）日本造園学会編，技報堂出版，48
- 4) 尼崎博正（1994）：七代目小川治兵衛（植治） 近代庭園の先覚者：ランドスケープ研究 58(2)，107
- 5) 尼崎博正編（1990）：植治の庭 小川治兵衛の世界：淡交社，215-220
- 6) 文献 4)，108
- 7) 尼崎博正（2002）：植治のデザインの特徴と時代背景：庭石と水の由来－日本庭園の石質と水系，昭和堂，275
- 8) 文献 5)，文献 7)
- 9) 文献 1)，7-19，並びに文献 7)
- 10) 鈴木博之（1982）：山縣有朋の庭園観：古稀庵記録保存調査団・鈴木博之編，山縣有朋邸小田原古稀庵調査報告書，千代田火災海上保険，9-11
- 11) 前島康彦（1980）：山縣有朋：造園修景大事典 第8巻，同朋社出版，127
- 12) 徳富蘇峰（1933）：公爵山縣有朋伝：山縣有朋公記念事業会，を参考に作成。

- 13) 文献 10) : 邸宅の変遷, 12-16
- 14) 木屋町の無鄰庵は元々豪商角倉了以の別邸跡であったもので庭園も角倉時代が原型。山縣が3年間ほど所有して京都別邸とした。現在は料亭「がんこ高瀬川二条苑」。また、小田原の古稀庵は太平洋戦争後の1947年に所有権が山縣家から移り、その後「ホテル古稀庵」として営業していたが、それも1970年までに閉業して放置状態となり、1980年には千代田火災海上保険株式会社(現・あいおい損害保険株式会社)の所有となって、建物をすべて新築し、同社の小田原研修所となって現在に至っている。庭園は部分的に現存するものの、全体像は分断されている。2004年現在毎週日曜日に限り、有料公開されている。
- 15) 近藤正一(1910): 山縣公爵の庭: 名園五十種, 博文館, 59
- 16) 斎藤隆介(1979): 職人衆昔話: 文芸春秋, 152-153 には飯田十基(談話)の師匠として小石川雑司ヶ谷の岩本勝五郎師匠として登場する。「大庭が得意なんですが、この人の特徴は、松本師匠とは逆に、手前に小さいものを置き、遠くに大樹を植えて庭の中央に視線をひく、というところでしょう。」
- 17) 文献 10), 10
- 18) 参謀本部陸軍部測量局(1887): 五千分一東京図: 国土地理院所蔵 大日本測量複製, を基本に作成。
- 19) 山本松谷(1907): 目白台下駒塚橋辺の景: 風俗画報, 明治40年1月
- 20) 山縣有朋(1897): 椿山荘記(椿山荘庭園内石碑文)
- 21) 文京区教育委員会編(1976): 文京の文化史: 文京区教育委員会, 234 によれば、松尾芭蕉の句「五月雨にかくれるものや瀬田の橋」は芭蕉庵に住んだという芭蕉が眼下に広がる早稲田たんぼを琵琶湖と見立てて詠んだという。
- 22) 徳富猪一郎(蘇峰)(1933): 公爵山縣有朋伝: 山縣有朋公記念事業会, 1115
- 23) 文献 20)
- 24) 藤田富子(1952): 椿山荘記: 私家版, 13-14
- 25) 文献 15) 62
- 26) 大橋乙羽(1896): 山縣侯の椿山荘: 太陽 2 (8), 博文館, 口絵
- 27) 文献 26), 248-251
- 28) 内山正如(1908): 椿山荘: 家屋と庭園, 博文館, 255-257
- 29) 文献 15), 59-64
- 30) 文献 10)
- 31) 文献 1) 12-14
- 32) 田中正大(1987): 近藤正一と明治の庭園: 京都大学造園学教室編 造園の歴史と文化, 養賢堂, 143-167
- 33) 矢ヶ崎善太郎(2001): 近代の和風建築と庭園: 月刊文化財 457号, 第一法規出版, 17-18
- 34) 文献 7) 274-275
- 35) 文献 1) 13-14
- 36) 鈴木博之(1990): 東京の地霊: 文芸春秋, 157 この水道は山県水道と呼ばれ明治42年(1909)頃には完成していたが、小田原市に水道が造られるのは昭和11年(1936)のことだという。
- 37) 御手洗辰雄(1958): 日本宰相列伝 2 山縣有朋: 時事通信社, 217
- 38) 景観デザイン研究会(2000): 近世城下町における水都のランドデザインⅡ: 景観デザイン研究会, 1-22
- 39) 吉田初三郎(1932): 萩市街鳥瞰図屏風, 192cm×365cm, 萩博物館所蔵
- 40) 御山路神社は、阿武川氾濫による水害に困った川島の人たちが、水災を治める神を祀るためにこの分流地に建立した。しかし1910年(明治43)の神社併合時に旧萩城郭内の春日神社と併合されたため、跡地の湮滅を恐れて山縣がこの石碑を建てたものである。
- 41) 文献 37)
- 42) 文献 33)
- 43) 文献 10) 16-17
- 44) 文献 1), 13-14
- 45) 野村勘治(1997): 旅に出たら寄ってみたい庭 30: 小学館, 88 (2004.3.27 受付, 2005.1.8 受理)

Summary: Aritomo Yamagata (1838-1922) who was the famous serviceman and politician at the Meiji era had a hobby of garden design. It is very famous that *Murin-an* garden (1896) in Kyoto had a strong influence on shaping a modern Japanese garden style. It is Yamagata that planned this garden and conducted the garden master *Ueji* who is considered as a leader of modern garden design of Japan. Therefore it should be said that Yamagata had a very strong influence on the modern garden design of Japan. However, there are a lot of studies on Ueji and his works, but little on the gardens of Yamagata. This study aimed to clarify the image and view of gardens on the mind of Yamagata through mainly considering *Chinzan-so* garden (1878) in *Mejiro*, Tokyo that he made before meeting Ueji and used as his main mansion. Through the analysis of basic plan and design of *Chinzan-so* garden and the research on the landscape of his hometown *Hagi* in *Yamaguchi* prefecture, as the result, the authors pointed out that there is the similarity of water feature between the scenery of Yamagata's gardens and his hometown landscape. It would be said that Yamagata's garden design motive was from his mindscape of hometown, *Kawashima* in Hagi city.